

諏訪之瀬島における I ターン者定着の要因

西村 知¹・萩野 誠¹・桑原季雄²

Why Do People Move to Suwanosejima to Settle Down?

NISHIMURA Satoru¹, HAGINO Makoto¹ and KUWAHARA Sueo²

1: 鹿児島大学法文学部
2: 鹿児島大学共通教育センター

1: *Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University*

2: *Center for General Education, Kagoshima University*

要旨

鹿児島県鹿児島郡十島村の諏訪之瀬島は、平成 28 年 5 月現在、人口 79 人の小さな離島であるが、最近では I ターン者の増加による若年層人口の増加によって、人口減・高齢化に悩む離島、中山間地域、地方自治体に注目されている。本研究は、この I ターン者増加、定着の要因を島に住む I ターン者へ聞き取り調査を行うことによって明らかにした。聞き取り調査の結果、平成 22 年度から始まった十島村の様々な移住促進政策、特に子供の教育への支援が子育て世代の若いカップルの I ターン者を島に呼びこむ要因となったことがわかった。また、1960 年代後半に形成されたコミュニン「バンヤン・アシラム」を目指して移住した I ターン者の一部が島の社会や文化の形成に寄与していることも明らかになった。島民の多様性、I ターン者受け入れ多様な主体の協働が島の経済・社会を活性化していると見える。

はじめに：研究の目的・方法

本研究の目的は、離島における I ターン者定着要因を諏訪之瀬島の事例を用いて明らかにすることである。この課題の解明のために、十島村役場地域振興課において聞き取り調査および統計資料の収集を行った。また、諏訪之瀬島を訪れ、I ターン者へ移住に至った過程や島での暮らしの現況について聞き取り調査を行った。

考察 1：諏訪之瀬島の移住は I ターン者が牽引

諏訪之瀬島と十島村の人口の推移を平成 12 年度から平成 28 年度まで示した

のが図1である。この図から、平成22年度より、村、諏訪之瀬島ともに右上がりに人口が増えていることがわかる。また、諏訪之瀬島の人口は、平成22年度の42人から平成28年度の人口79人となり伸び率は、88.1%であり、十島村の同期間の人口増加率、20%（594人から713人）を大きく上回っている。図2は、諏訪之瀬島の年齢別人口、すなわち、年少人口（15歳未満）、生産年齢人口（15歳以上65歳未満）、高齢者人口（65歳以上）の推移を平成14年、22年、28年について示したものである。この図から、平成12年から平成22年は、年少人口、生産年齢人口が減少し、高齢者人口が増加している。一方、平成22年から28年には、年少人口と生産年齢人口が大きく増加しているのに対して高齢者人口はほぼ横ばいである。諏訪野瀬島では、人口増加と平均年齢の若年化が進んでいるのである。表1は、平成21年度から28年度までの、諏訪の瀬島への移住者を年度別U・Iターン者及びIターン者の世帯数・人数について示したものである。この期間の合計を見ると、U・Iターン者の世帯数は20に対しIターン者のみは15と75%を占める。人数においては、前者が38人、後者が31人と、81.6%を占める。島の人口の増加・若年化はIターン者によるものであることがわかる。

図1 十島村と諏訪之瀬島の人口の推移（人）（平成12年～平成28年）

出所：十島村役場 注：教職員・留学生を除く

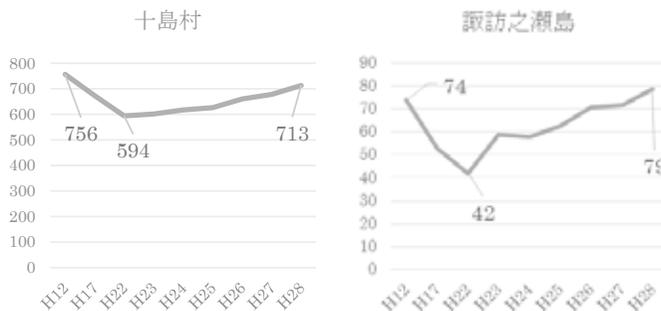


図2 年齢別人口推移（人）

（平成14年、22年、28年の8月末）

出所：十島村役場 注：教職員・留学生を除く



Why do people move to Suwanosejima to settle down?

表1 諏訪之瀬島の年度別U・Iターン者及びIターン者世帯数・人数

	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	合計 (H21～ H28)
U・Iターン者世帯数	1	4	3	1	5	2	1	3	20
〃 人数(人)	1	6	7	3	11	4	1	5	38
Iターン者世帯数	1	2	2	0	5	1	1	3	15
〃 人数(人)	1	4	6	0	11	3	1	5	31

出所：十島村役場 注：教職員・留学生を除く

考察2：Iターン者定住の要因としての少人数教育・コミュニケーション

諏訪之瀬島のIターン者が多い原因の第一は、十島村が平成22年度より開始した一連の定住促進政策である。平成22年度には就業者育成奨励金事業、空き家の改修などを行った。平成24年度には、役場の定住促進窓口を一本化した。平成25年度からは都市圏の移住イベントに参加するようになった。平成26年度は、就業の場の確保を行った。平成27年度からは、地域おこし協力隊の募集を行った。また、保育園も開園した。島で力を入れているのが少人数教育、子育て支援である。聞き取り調査を行ったA氏(男性、36歳)は、島内にある九州電工の発電所員の公募に応募し、採用され、妻と子供二人を連れて7年前に島に移住した。島で、二人の子供をもうけ、現在では6人家族である。彼が、島への移住を決めた理由は、田舎暮らしが好きであるという個人的な理由が強かったが、定職があることと子育てに時間を取ることができるということも重要な理由であった。島には、小中学校があるが、一学年は1人から3人であり、少人数教育を受けることができる。また、村から子育て手当が第一子、第二子には月額1万円、第三子からは、月額2万円が支払われる。A氏によると、以前住んでいた大阪とは違い、子供と遊ぶ時間を十分に持てるという。現在二歳が一番下の子供が中学を卒業するまでは子育ての環境の良い諏訪之瀬島に住み続けるという。Iターン者の多い第二の理由は、島を支える古株のIターン者の存在である。聞き取り調査に協力をしていただいたB氏(男性72歳)もその一人である。彼は、大学卒業後の長い世界旅行の後、当時、島にあった共同生活を行うコミュニケーション、「バンヤン・アシュラム」を訪ねて26歳の時に島に移住した。このコミュニケーションはマスコミからは「ヒッピー」の一団と呼ばれていた集団であるが、彼の説明によると「ヒンズー教や仏教を通して人間の感性に向かう自給自足を行う集団」であった。このコミュニケーションは、島が人口減で立ち行かない状況になった時に、島を訪れた榊七夫(さかき ななお)に長老たちが若い人を島に連れてきて住んでもらうように懇願したのが始まりであった。はしけ作業を行う若者が島にいなくなると島が閉鎖されるためであった。彼は、東京の「部族」という集団に属していたが、仲間間に声をかけて、アメリカ人の詩人ゲーリー・スナイダーなどとともにコミュニケーションを1967年に作った。このコミュニケーションには多くの若者が訪れ1977年、1978年までには共同生活を続けていた。以降、コミュニケーションの人々の多くは島から出たが、島に残り、世帯単位で生活する者もいた。残った人々は島の活動、行事に参加し、島を支える島民となっていく。現在では、5世帯が島の長老と

して神社で行われる様々な行事（漁祭り、御岳祭りなど）や自治会行事（道路清掃、夏祭りなど）、学校行事（運動会、駅伝大会など）の運営において中心的な存在になっている。

考察3:多様性の観点から

諏訪之瀬島は、今後は、空き家不足や支援が切れた後のIターン者の定着など様々な課題が残るものの、現時点では、Iターン者による島の活性化に成功している。この成功要因を「多様性」の観点から整理すると以下の二点にまとめることができる。第一点は、島人の多様性である。島は、文化10年（1813年）の火山大噴火の後に無人島化し、70年後の1880年代に奄美大島出身の藤井富伝らが入植した。そして、前述の通り、1960年代末には、コミューンの形成が新しい島民グループを形成した。奄美からの入植者の子孫とコミューンの島人たちは差異を乗り越えて共同性を作り上げた。このことが、多様な価値観を持つIターン者を許容する文化を生んだと考えられる。第二の要因は、多様な主体の協働関係である。島人は、役場やNPOと協力しながらIターン者の受け入れに力を入れている。NPO法人トカラ・インターフェースはIターン者希望者のための島の視察ツアーの企画・運営も行っている。

参考資料

NPO法人トカラ・インターフェース ホームページ

<http://tokara-yui.net/whats/>（平成29年12月26日閲覧）。

鹿児島県十島村地域振興課定住対策室(2014)『十島村 定住者希望者向け情報誌』。

十島村(2017)『魅惑の島々 トカラ列島 <資料編>』株式会社トライ社。

十島村公式ホームページ <http://www.tokara.jp/>（平成29年12月26日閲覧）。

十島島村立諏訪之瀬島小中学校ホームページ <http://www.toshima-sc.net/suwanose/>（平成29年12月26日閲覧）。

謝辞

研究・調査においては、十島村役場の隈元様、出張所員の伊藤様、島民の皆様より多大なご協力をいただきました。心から感謝いたします。